



企画展 主催：六ヶ所村立郷土館

共催：公益財団法人 環境科学技術研究所

六ヶ所村の植物たち

～その生存戦力と水質浄化植物を紹介～

1 環境科学技術研究所山上睦氏による

ギャラリートーク：5/24(土)10時～11時、郷土館

2 植物観察会：村内の貴重な花々の観察会

(1)4月19日(土)9時30分～12時

・カタクリ：郷土館集合

(2)6月28日(土)9時30分～12時30分

・ノハナショウブ：郷土館集合

(3)7月12日(土)10時～12時

・スカシユリ等：泊漁業協同組合駐車場集合

(4)10月18日(土)10時～12時

・コハマギク：泊漁業協同組合駐車場集合

企画展では、貴重な植物や自分の種をつなぐための驚くべき生存戦略を持っている植物などを紹介。

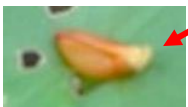
また、水質を浄化する植物を使って、沼の水質を浄化する取り組みや地域活性化につなげる取り組みなどを紹介する。

3 植物たちの生存戦略

(1)カタクリ：種をアリに運ばせる花



カタクリの種の先にはエライオソームというアリが好む物質が付いていて、アリはせっせと巣穴に運ぶ。アリはエライオソームだけを取って、残りは巣穴の外に運び出す。種はそこに根付き芽を出し、花を咲かせるという生存戦略である。



(2)ザゼンソウ：発熱して虫を呼ぶ花



開花する時に、肉穂花序が約25度まで発熱し、悪臭迄放ち、この時期の昆虫(ハエ)を独占し、受粉の確立を上げる生存戦略を取っている。

(3)在来種のタンポポとセイヨウタンポポの戦い？



在来種のタンポポは、ライバルのいない時期の春先に花を咲かせ、虫たちを独占する。セイヨウタンポポは、受粉しなくても、種を作る「単為生殖」ができる。外来種の花粉をまちがって受け入れた在来種のタンポポは、種子を作るのに失敗するという「繁殖干渉」によって数を減らしている。

(4)ニッコウキスゲ：蝶に花粉を運んでもらう



蜜が細長い管の奥にあるので、アゲハチョウが蜜を吸うとき、長いめしべに花粉を付け、羽についている他の花粉が付く仕組みになっている。同花受粉を避ける生存戦略である。

(5)ノハナショウブ：ハナショウブの原種です



ハチが蜜を吸うには、外花被片とめしべとの間にもぐり込む構造になっていて、その時背中に付いていた花粉が他の花のめしべに付き受粉する。同花受粉を避ける生存戦略である。

(6)コモチレンゲ：たくさんの子供をつくる



脇芽からランナー(走出枝)を出し子株でどんどん増える。耐寒性があり、海水のような塩類や乾燥に耐えるため、水をためる厚い葉を持つ。

(7)ヤドリギ：他の木に寄生する植物



鳥がヤドリギの果実を食べ、その種子を消化しないまま糞として排出する。種は粘液に包まれていて、鳥が排泄時、粘液が糸を引いて近くの枝の表面にしっかり張り付き発芽する。このようにして広範囲に種を広げる生存戦略をとっている。

(8)青森ヒバ：親木が幼木を守り育てる



大木の周りで種が発芽した幼木は、日陰でも育つ。親木と地下茎が菌糸(菌根菌)でつながり養分をもらっているからだ。

4 水質を浄化する植物とその取り組み

(1)ヨシ：水質浄化で大注目



環境科学技術研究所の山上睦氏は、平沼川から田面木沼への流入口付近のヨシ原に水を流し込み、窒素やリンを吸収させ取り除く試験に成功。その後、ヨシを刈り取り、肥料として生産するめどが立った。

※副読本：小5社会科「環境を守る」や村内の美しい植物(ランほか)も紹介。浄化植物(ホテイアオイと藍)も展示。

(2)ミズバショウ:水質を浄化する植物の増殖



環境科学技術研究所の山上陸氏は、エネルギーを考える未来塾（代表伊藤夏子氏）や平沼老人クラブの方々の協力を得て、旧平沼小学校跡地にて、ミズバショウの種から苗を育て、水質の浄化作用を持つ植物の増殖に成功。自然環境の保護を目指す。

(3)タデアイ:水質浄化と藍染め教室で地域活性化を！



藍も水耕栽培で育てることが実証できた。田面木沼の水の浄化に役立つ浄化藍として商品化を目指す。

(4)ホテイアオイ:水質を浄化する植物



ホテイアオイは生育が早く、20株ほどを水槽に入れると、約一か月で水面を覆いつくし、窒素とリンを吸収し水質を浄化した。

5 増殖を目指している植物

(1)キツネノカミソリ:六ヶ所村が北限の植物？！



キツネノカミソリは、太平洋岸の北限は八戸の種差海岸であると思われていたが、一昨年、村内で小さな群落を見つけた。早急に保護

が必要である。

(2)コオニユリ:湿地に生えるユリ



夏に道端などに咲くオニユリは、ムカゴで増えるが、正月に食べられるゆり根のゆりとして知られるコオニユリはムカゴができないかわりに種で増える。

(3)スカシユリ・エゾスカシユリ・クルマユリ:泊で見られるユリ

スカシユリは日本列島中部以北に分布し



草丈が60cmほど。花卉の根元が透けて見えるのでこの名がついた。泊海岸では、北海道で見られるエゾスカシユリも生えている。草丈が30cmほどで低く、花がやや大きい。泊の山手に行くと高山性のクルマユリも見られる。数が激減しているユリである。茎に葉が車状に付着することからクルマユリの名前が付いた。

6 希少植物

(1)エゾカワラナデシコ:平地で見られる高山植物



海から隔てた山手側でエゾカワラナデシコが見られる。苞が2対で、下部の1対は大きい。カワラナデシコは、苞が3から4対ある。

(2)エゾリンドウ:園芸リンドウの親になった花



観賞価値の高いエゾリンドウが村内の湿地でも野生で育っている。昔は村内にいっぱいあり、学校帰りに摘んで帰ったと聞く。

(3)オオバナノエンレイソ:大群落が見られなくなった



六ヶ所村にもかつてオオバナノエンレイソの大群落が見られた。発芽後ゆっくり成長し、10年以上かけて初めて花が咲く。

(4)オキナグサ:絶滅してしまった花！？



日本のオキナグサはつぼみの時は花が下を向き、開花時でも花が横向きに咲く場合が多い。花の色は黒みがかった赤色である。

(5)サワギキョウ:虫がいないと種がつかない花



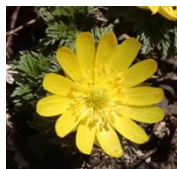
トラマルハナバチがおしべの花粉を付け、他の花のめしべに受粉させる。農薬などの影響でバチの数が少なくなりタネが付かなくなってしまった。

(6)ショウジョウバカマ:六ヶ所音頭に出てくる花



長い間探していたが見つからなかったが、2022年平沼の湿地に僅かな群落を見つけた。昔は田んぼの周りの水路端にいっぱい生えていたという。

(7)フクジュソウ:山草ブームで見られなくなった植物



フクジュソウとミチノクフクジュソウがあり、一番外側のガク片（裏側が茶色）長さでこの2種を区別する。長さ1/2がミチノクフクジュソウ。

(8)ヒメキンポウゲ:塩性湿地に生きる植物



村の湿地や河口付近には、夏に直径6mm程の小さな黄色いヒメキンポウゲが咲いている。青森県の絶滅危惧植物。

(9)マリモ:絶滅した植物?植物→原生生物(緑藻類)

水質悪化で絶滅か? (田面木沼、市柳沼、姉沼、内沼)。